

報道関係各位

NHK international, inc.

一般財団法人 NHK インターナショナル

文化庁メディア芸術祭

海外メディア芸術祭等参加事業

シンガポール企画展「Landscapes: New vision through multiple windows」

開催のご案内

文化庁が主催、一般財団法人 NHK インターナショナルが企画・運営する「海外メディア芸術祭等参加事業」は、メディアアート、映像、ウェブ、ゲーム、アニメーション、マンガ作品等の優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のフェスティバルや施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に展示・上映・プレゼンテーション等を実施しています。

2017年2月3日(金)から2月18日(土)まで、在シンガポール日本国大使館内の、日本文化の発信拠点であるジャパン・クリエイティブ・センターにて、企画展を開催します。企画ディレクターは、1996年から活動を開始し、実験的なプロジェクトを数多く手がけてきたアーティスト「エキソニモ」の千房けん輔氏と赤岩やえ氏です。本企画展では、「Landscapes: New vision through multiple windows」をテーマにセレクションしたメディア芸術作品を展示します。そのほか、市内の映画館にて、人気劇場アニメーションの上映も実施します。

海外メディア芸術祭等参加事業 企画展

「Landscapes: New vision through multiple windows」

会期:2017年2月3日(金)～2月18日(土) 10:00～18:00 *日・月休館

2月3日(金) 19:00-オープニング

会場:ジャパン・クリエイティブ・センター (4 Nassim Road 258372, シンガポール)

上映会場: Shaw Theatres Lido 5 (350, Orchard Road, 5th Floor, Shaw House)

上映日:2017年2月5日(日)、2月12日(日)

入場料:無料

<http://jmaf-promote.jp/>

主催:文化庁

共催:在シンガポール日本国大使館ジャパン・クリエイティブ・センター (JCC)

企画ディレクター:エキソニモ(千房けん輔・赤岩やえ)

事業アドバイザー:古川 タク(アニメーション作家)

毛利 嘉孝(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授/社会学)

企画・運営:一般財団法人NHKインターナショナル

本件に関する問い合わせ先

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業事務局(一般財団法人NHKインターナショナル内)

担当:湧井(わくい)・座馬(ざんま)・小山(おやま)

E-mail: jmaf-info@nhkint.or.jp TEL: 03-6415-8500 FAX: 03-3770-1829

文化庁メディア芸術祭

海外メディア芸術祭等参加事業 企画展

「Landscapes: New vision through multiple windows」

国際文化芸術都市構想のもと、国を挙げて芸術文化振興に取り組んでいるシンガポールは、現在アジアのアートマーケットの中心地となり、様々なアートイベントが年間を通じて開催されています。2016年は日本とシンガポール外交関係樹立50周年の節目の年にあたり、様々なイベントを通じて日本・シンガポール両国の情報発信、文化交流が図られています。

本展覧会では、日本を代表するメディアアーティストや、シンガポールをはじめ世界各国のアーティストによるメディア芸術作品12点を紹介いたします。

展覧会コンセプト

企画ディレクター エキシニモ(千房けん輔・赤岩やえ)

近年、コンピューターやスマートフォンのディスプレイを通じて、我々は世界とつながりそこにリアリティを見出している。ディスプレイはまるで新しい風景が映り込む「窓」のようである。

しかし窓について考えれば、既存のメディアであるテレビ、または写真などの印刷物、そして絵画、さらに部屋に取り付けられた文字通りの窓なども等しく「向こう側の風景へと」つながる機能を持つものであったことに気がつく。

近年は特に、デバイスの小型／携帯化、インターネットへの常時接続化によってその「窓」を眺める時間が劇的に増え、我々の思い描く「外に広がる世界」のイメージは更新されている。

インターネットによってまるで世界が(例えばシンガポールからみた日本が)とても近いもののように感じたり、そこに行ったかのような錯覚を感じることもある。しかし、そこから見えている風景はどれくらい現実の世界とリンクしたものなのだろうか。

本展では、今まで壁に取り付けられていた窓が、ポケットに忍び込んできた現代から見える世界の風景を再点検する。目の前に広がる風景を見つめなおすことで、我々がリアルに感じる世界のありかを探ろうとする試みである。今この瞬間の、そしてこれからの時代を読み解く上での様々な視点を持った作品が集まる、メディア芸術の多様な可能性を示す展覧会である。

エキシニモ(千房 けん輔・赤岩 やえ) / exonemo (SEMBO Kensuke, AKAIWA Yae)

怒りと笑いとテキストエディタを駆使し、さまざまなメディアにハッキングの感覚で挑むアートユニット。千房けん輔と赤岩やえにより1996年よりウェブ上で活動開始。2000年より活動をインスタレーション、ライブ・パフォーマンス、イヴェント・プロデュース、コミュニティ・オーガナイズなどへと拡張し、デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、テクノロジーとユーザーの関係性を露にし、ユーモアのある切り口と新しい視点を携えた実験的なプロジェクトを数多く手がける。国内外の展覧会やフェスティバルで活躍。2006年《The Road Movie》がアルス・エレクトロニカ ネット・ヴィジョン部門でゴールデン・ニカ賞を受賞。2010年に東京 TDC 賞で《ANTIBOT T-SHIRTS》が RGB 賞を受賞。2012年より IDPW を組織し「インターネットヤミ市」などを手がける。2015年より、NEW MUSEUM によるインキュベータ NEW INC のメンバーとして、ニューヨークを拠点に活動中。

作品展示

■『記念写真』 海老原 祥子 [2015/グラフィックアート/第19回アート部門審査委員会推薦作品]

* 日本版とあわせ、『シンガポール記念写真』を展示予定



©Shoko EBIHARA

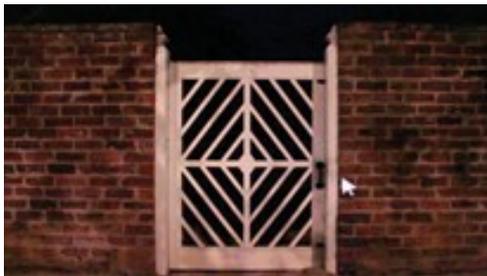
全国の観光地にある団体客用の撮影台に作家がスーツ姿でひとり立ち、現地の撮影業者に撮影してもらった写真を購入する。ネガやデータは手元に残らず、撮影依頼から購入までの一連の流れと、渡された1枚の観光写真が作品となる。それぞれに使うカメラは異なり、プリントする機材も異なり、紙もプリントの大きさは一定ではない。ほぼ同じ構図、そして、衣装はビジネススーツで統一し没個性化させることで、写真の中でアイコン的に映る作家が、さまざまな日本の風景に刻まれていく。

海老原 祥子 / EBIHARA Shoko

東京生まれ。写真家 / 美術家。東京を拠点に活動。 <http://shokoebihara.com/>

■『Double Click to Open』 Angelica VERDAN

[2015/映像/第19回アート部門審査委員会推薦作品]



©2015 Angelica Verdán

デジタル技術やインターフェイスと人間との関わりを探る作品。本作では、現実の閉じたドアの上に投影されたカーソルが操作される様子が映し出される。作品名に従い、ドアが開く場所を探してダブルクリックしても、ドアは開かない。デジタルインターフェイス上で馴染みあるアイコンに対し、インタラクティブな反応を期待してしまう人間の心理を意識した映像作品。(3 min. 41 sec.)

Angelica VERDAN

1992年、米国、ワシントン特別区生まれ。映像作家 / ビデオアーティスト。バージニア在住。

<https://angelicaverdan.wordpress.com/>

■『Waiting for the Elevator』 Sarah CHOO Jing

[2015/映像インスタレーション/第19回アート部門審査委員会推薦作品]



©SARAHCHOOJING

シンガポールの街を撮影し、実写映像をつなげたマルチメディアインスタレーション。作中では、何気ない人々の行動が繰り返される。作者はシンガポールに特有の「ボイド・デック」(ビル内の用途不明の空間)の社会的な目的を考える。このパノラマ合成映像は究極の虚構空間としてあり、長い時間をかけた断片の蓄積である。

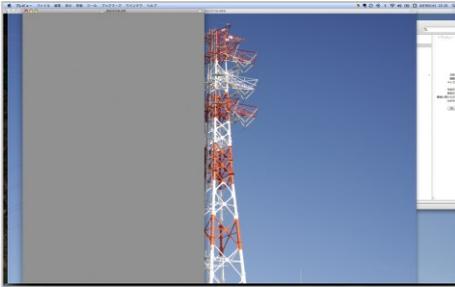
(5 min. 22 sec.)

Sarah CHOO Jing

1990年生まれ。マルチメディア・アーティスト。 <http://www.sarahchoojing.com/>

■『風景』 [2012/デジタルフォト]

新津保 建秀 [第14回アート部門審査委員会推薦選出作家]



©Kenshu Shintsubo

風景をその空間の現在のありようと、その場における人の営みの痕跡が堆積したものとの総体であると捉え、その場に内在する人の行為の集積によって生成されたレイヤーを写しとろうとする。さまざまな風景写真とともに、情報工学的に生成された地図や、デスクトップ上に展開された個人的な視線の集積によるアーカイブなどであり、堆積する記憶はネットワーク上の不可視の視線と連なっていく。

新津保 建秀 / SHINTSUBO Kenshu

1968年東京生まれ。写真家。映像・写真・フィールドレコーディングなどによる制作とともに、建築・文藝・音楽・情報デザインなど領域を横断したドキュメントと共同作業を多く手掛ける。<http://www.kenshu-shintsubo.com/>

■『100100 views of Mount Fuji』 [2008-2010/デジタルフォト]

Jens SUNDHEIM [第9回アート部門審査委員会推薦選出作家]



©Jens Sundheim

2008年から2010年まで、富士山のライブイメージをウェブカメラにより3分毎にアーカイブした記録の中から、いくつかのイメージを写真として出力。葛飾北斎の『富嶽三十六景』(1830年-1836年)『富嶽百景』(1834年)を意図的に参照することで、フィルタリングされていない、高速で、正確なライブトランスミッションによる現代版の北斎を浮かび上がらせている。

Jens SUNDHEIM

1970年、ドイツ生まれ。写真家/ビジュアルアーティスト。ドイツのルール地方を拠点に活動。<http://www.jens-sundheim.de/>

■『Popular Screen Sizes』 Rafaël ROZENDAAL [2011/インスタレーション]



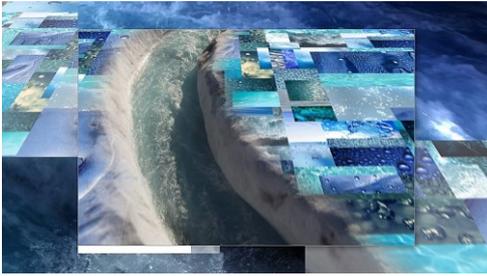
©Rafaël Rozendaal

3.5インチから60インチまでの見慣れたサイズの鏡が並べられ、それらに映し出される日常が鑑賞者に情報機器のスクリーンに映るものとして捉えられていく。鏡の反射と光の動きの流動性に着眼し、“何か”と“何でもないもの”の間にある繊細な境界線を探った作品。

Rafaël ROZENDAAL

1980年オランダ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。インターネットを素材にした作品を制作するビジュアルアーティスト。
<http://www.newrafael.com/>

■『Stream 2014』 Joe HAMILTON [2014/映像]



©Joe Hamilton

作家自身のイメージ素材とインターネットから取り入れたイメージ素材をデジタルコラージュした映像作品。オンラインとオフラインのもつ異なるテクスチャー(岩、水や葉、刷毛やモノクロの層)の画像を統合することによって、鑑賞者の持つ観念にゆらぎを引き起こす。
(1 min. 20 sec.)

Joe HAMILTON

1982年、オーストラリア生まれ。メルボルンを中心に活動。<http://joehamilton.info/>

■『You would come back there to see me again the following day.』 津田 道子
[2016/インスタレーション]



©Michiko Tsuda 写真: 山本紉

鑑賞者が作品の中を移動すると、鏡に映る鏡像やビデオカメラを通してスクリーンに映像が投影される。またフレーム越しに見る実像や、それらが組み合わされた映像によって、思わぬかたちで自分や他の人の姿を目撃する。鑑賞者は視線の迷路に入り込み、作品の中を自由に動き回ることによって、自分が見ているものがどのような過程を経て映りこんでいるのかを、探っていく。

津田 道子 / TSUDA Michiko

1980年神奈川県生まれ。神奈川と東京にて活動。東京藝術大学大学院映像研究科博士課程修了(博士:映像メディア学)。
<http://2da.jp/>

■『無題』 高嶺 格 [2011、再製作 2017]



©Tadasu Takamine photo:今井智己

油粘土で作られた額縁のみの作品。横浜美術館で行われた大規模個展「とおくてよくみえない」においては、キャンバス状に張った毛布と共に、絵画のフレームをずらす作品として展示された。本来、絵画などの作品を引き立たせ、作品を「完成した形」へと昇華する役割をもつ額縁を、柔軟で不定形であるがゆえに通常は作品のスケッチのために用いられる油土というメディアによって制作した。誰もが子供の頃に使った経験があり、指の痕跡が強く残る油土の質感により、意識は額縁そのものへとフォーカスされ、メディアや作品自体のあり方を問いかける。

高嶺 格 / TAKAMINE Tadasu

1968年鹿児島県生まれ。美術家、演出家。秋田公立美術大学准教授。パフォーマンス作品の演出、インスタレーションなどを手がける。<http://www.takaminet.com/>

■『Fluttering Frame』〔2013/映像〕

エキソニモ 〔本企画ディレクター/第16回アート部門、第17回エンターテインメント部門審査員推薦選出作家〕



©exonemo

クラウド・ソーシングを利用して、31ヶ国 54人の参加者によって作られた映像作品。日本の公共放送 NHK が放送の終わりに流していた日本国旗がはためく映像を、世界中の人のリビングルームのテレビに映し出してもらい、そのリビングルームごと撮影した映像を収集。映像の断片をつなぎあわせて旗が揺らめく様子をアニメートした。インターネットの時代に国という枠組みが どれだけ意味を持つのだろうかという疑問から出発し、国のシンボルである旗を世界中に拡散させることで、国のありかを探った作品。

■『土星マンション』 岩岡 ヒサエ 〔2011/マンガ/第15回マンガ部門大賞〕

原画展示



©IWAOKA Hisae

地球全体が自然保護区域となり、地上に降りることが許されなくなった時代、人間は遙か35,000メートル上空の建造物で暮らしていた。上層・中層・下層に分かれた巨大なリングシステムで主人公・ミツは生まれ育った。ミツは中学卒業と同時に、亡き父と同じ職業「リングシステムの窓を拭く仕事」に就くこととなる。職場の師匠や近所の人々、仕事の依頼主たちとの出会いを通して、仕事への誇りや自信を獲得していくミツの成長を丁寧に描いた物語。

■『電腦コイル』 磯 光雄 〔2007/テレビアニメーション/第11回アニメーション部門優秀賞〕



© MITSUO ISO / TOKUMASHOTEN, Den-noh COIL SEISAKUIINKAI

舞台は近未来 202X年の大黒市。子どもたちの間では、電腦世界を楽しめるコンピューター"電腦メガネ"が大流行していた。そんな中、大黒市に転校してきた小此木優子(おこのぎゆうこ)は、不思議な出来事を次々と経験する。

上映会『電腦コイル SP(スペシャル)』90分
2月11日(土)、18日(土) 14:00-15:00

■Japanese Landscapes from Manga and Animation

JCC内のライブラリーにて、マンガやアニメーションの鑑賞スペースを設置。マンガやアニメーションを通して日本の風景を紹介する。

劇場アニメーション上映: Japanese Scenery in Animation

上映会場: Shaw Theatres Lido 5 (350, Orchard Road, 5th Floor, Shaw House, Singapore 238868)

上映日: 2017年2月5日(日)、2月12日(日) 入場料: 無料

日本の美しい街並みを舞台に時を超えて綴られる、日本の美しい風景。話題の作品や人気監督による、劇場アニメーションを一挙上映します。アニメーションで旅する日本の Landscapes(風景)です。

■『君の名は。』 [2016/劇場アニメーション]

新海 誠 [第6回、9回、17回アニメーション部門審査委員会推薦作品選出作家]

上映日: 2017年2月5日(日) 12:30~



© 2016 TOHO / CoMix Wave Films / KADOKAWA / JR Kikaku / AMUSE / voque ting / Lawson HMV Entertainment

1000年ぶりという彗星の接近が一カ月後に迫ったある日、山深い田舎町に暮らす女子高生の宮水三葉は、自分が東京の男子高校生になった夢を見る。日頃から田舎の小さな町に窮屈し、都会に憧れを抱いていた三葉は、夢の中で都会を満喫する。一方、東京で暮らす男子高校生の立花瀧も、行ったこともない山奥の町で自分が女子高生になっている夢を見ていた。心と身体が入れ替わる現象が続き、互いの存在を知った瀧と三葉だったが、やがて彼らは意外な真実を知ることになる。

(1 h. 46 min.)

■『百日紅 ~ Miss HOKUSAI ~』原 恵一

[2014-2015/劇場アニメーション/第19回アニメーション部門審査委員会推薦作品]

上映日: 2017年2月5日(日) 14:50~



©2014-2015 Hinako Sugiura MS.HS / Saruberi Film Partners

江戸風俗研究者である杉浦日向子のマンガ『百日紅(さるすべり)』を長編映画化した作品。火事や妖怪騒ぎなど、喜怒哀楽に満ちあふれている江戸の町。浮世絵師として一世を風靡した葛飾北斎の娘であり、同じく浮世絵師として活躍したお栄(えい)(のちの葛飾応為(おうい))を主人公に、現代にも通じる江戸の人々の営みを描く。

(1 h. 29 min.)

■『ジョバンニの島』 西久保 瑞穂 [2014 / 劇場アニメーション / 第18回アニメーション部門優秀賞]

上映日:2017年2月5日(日) 16:50~



©2014 JAME

設定は1945年、北海道沖に戦火を免れて浮かぶ小さな島・色丹島(しこたんとう)。ここに、戦争の実感がないまま10歳の兄・純平と7歳の弟・寛太が暮らしていた。しかし8月15日の敗戦に伴い、彼らの生活に大きな変化が訪れる。明日にでも米国軍がやってくるのでは……と不安な日々を送る島民たちであったが、突然上陸したのはソ連軍だった。そして、いつの間にか国境線が変わり、やがて島にソ連兵の家族が移住することになる。島民と新しい隣人との共同生活が始まるのだが――。戦争の不条理と悲劇を「純平」の目線で辿りながら、言葉と文化の違いという壁を越えて、

子どもたちの絆が芽生えていくさまが描かれる。日本、ロシア、アルゼンチン、韓国、エストニア、アメリカ、イタリアからの多国籍スタッフが集結して送る、実話に基づいたアニメーション。(1 h. 41 min.)

■『この世界の片隅に』 [2016 / 劇場アニメーション]

片渕 須直 [第14回アニメーション部門優秀賞受賞作家、第5回アニメーション部門審査委員会推薦選出作家]

上映日:2017年2月12日(日) 15:00~



©Fumiyo Kono / Futabasha / Kono Sekai no Katasumi ni Project

原作マンガ『この世界の片隅に』 こうの 史代
[2009/第13回マンガ部門優秀賞]

18歳のすずさんに、突然縁談がもちあがる。良いも悪いも決められないまま話は進み、1944(昭和19)年2月、すずさんは呉へとお嫁にやって来る。呉はそのころ日本海軍の一大拠点で、軍港の街として栄え、世界最大の戦艦と謳われた「大和」も呉を母港としていた。見知らぬ土地で、海軍勤務の文官・北條周作の妻となったすずさんの日々が始まった。

1945(昭和20)年3月。呉は、空を埋め尽くすほどの数の艦載機による空襲にさらされ、すずさんが大切にしていたものが失われていく。それでも毎日が続く。そして、昭和20年の夏がやってくる——。(2 h. 9 min.)

■『言の葉の庭』 新海 誠 [2013 / 劇場アニメーション/第17回アニメーション部門審査委員会推薦作品]

上映日:2017年2月12日(日) 17:40~



©Makoto Shinkai / CoMix Wave Films

靴職人を目指す高校生・タカオは、雨の朝は決まって学校をさぼり、公園の日本庭園で靴のスケッチを描いていた。ある日、タカオは、ひとり缶ビールを飲む謎めいた年上の女性・ユキノと出会う。ふたりは約束もないまま雨の日だけの逢瀬を重ねるようになり、次第に心を通わせていく。居場所を見失ってしまったというユキノに、彼女がもっと歩きたくなるような靴を作りたいと願うタカオ。六月の空のように物憂げに揺れ動く、互いの思いをよそに梅雨は明けようとしていた。現代の東京を舞台にした繊細なドラマを、アニメーションでしかなしえない表現で紡ぎ出している。(46 min. 2 sec.)

イベント

会場: ジャパン・クリエイティブ・センター

■アーティストトーク セッション 1 [Landscapes of Japan and Singapore]

出演: 海老原 祥子 × Sarah CHOO Jing

日時: 2017年2月4日(土) 13:00-14:30

日本とシンガポール、それぞれの国や都市を新たな視点で切り取る二人の同性、同世代アーティストによるトーク。

■アーティストトーク セッション 2 [Landscape from unstable window]

出演: 高嶺 格 × エキソニモ

日時: 2017年2月4日(土) 15:00-16:30

油粘土という定着しない素材によって作られた額縁を展示する高嶺格と、映像の枠組みが不安定に瞬く作品 "Fluttering Frame" を展示するエキソニモ。両者に共通する、不安定な枠組みとしての窓(unstable window)から見える景色とは? メディアやそのフレームを批評的に捉える両作家によるトーク。

■上映『電腦コイルSP(スペシャル)』

日時: 2017年2月11日(土)、2月18日(土) 14:00-15:30

■企画ディレクター・エキソニモによるガイドツアー

日時: 2017年2月3日(金) 19:30-

参考

文化庁メディア芸術祭について

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。平成9年度(1997年)の開催以来、高い芸術性と創造性をもつ優れたメディア芸術作品を顕彰するとともに、受賞作品の展示・上映や、シンポジウム等の関連イベントを実施する受賞作品展を開催しています。昨年度[第19回]は、世界87の国と地域から4,417点に及ぶ作品の応募があり、なかでも国内からの応募数は2,201点と過去最多となりました。文化庁メディア芸術祭は多様化する現代の表現を見据える国際的なフェスティバルへと成長を続けています。また、文化庁では、メディア芸術の創造とその発展を図ることを目的に、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を国内外で広く紹介する多彩な事業を実施しています。海外・国内展開や創作活動支援等の関連事業を通じ、次代を見据えたフェスティバルを目指しています。

■文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のメディア芸術関連のフェスティバル・施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心とした企画展の開催やパッケージプログラムの上映、専門家によるプレゼンテーション、作家によるワークショップ等を実施しています。企画展では、企画ディレクターがテーマに基づいた作品キュレーションを行い、現地参加先と共同で展覧会を開催しています。



平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭受賞作品



海外メディア芸術祭等参加事業(マドリード企画展2016)

平成29年度[第20回]文化庁メディア芸術祭

作品募集 2016年7月7日(木)~9月9日(金)

受賞発表 2017年3月中旬

受賞作品展 2017年9月 会場:NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]、東京オペラシティアートギャラリー

ウェブサイト <http://j-mediaarts.jp>

Facebook <http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter @JMediaArtsFes



NHKインターナショナルは、文化庁が主催する文化庁メディア芸術祭の関連事業である「海外メディア芸術祭等参加事業」の企画運営を受託し、日本のメディア芸術の発展に努めています。